
マブラヴオルタネイティブ - 煉獄に吼えし双頭の狂犬

ドイツの銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラヴオルタネイティブ - 煉獄に吼えし双頭の狂犬

【Nコード】

N 8 7 3 2 W

【作者名】

ドイツの銀狼

【あらすじ】

もし神宮司まりもに兄貴がいたら…

そしてループキャラだったら…

そんな妄想で書きちゃった作品…否、駄作です。

同時執筆してるAC×IS「誰が為に鴉は鳴く」のアウトラスト
ーリーです。

1・2回目の世界（修正版）（前書き）

修正しました

1・2回目の世界（修正版）

とある兄妹の話をしよう。

兄妹には血の繋がりが無かった。

だが、それ故に2人は互いを必要とし、時に別れ…時に助け合い…そして惹かれていく。

後に彼等は日本帝国、そして国連軍内である異名を持つ最強の衛士となる。

D u a l H e a d ・ W a r D o g ・

双頭の狂犬

それが兄妹の異名だった。

2002年1月

中国領 新疆ウイグル自治区

あ号標的 オリジナルハイヴ攻略戦

「……ここまでか」

俺は操縦桿を操って、愛機『サンダーボルト?』を着地させた。

長時間の戦闘で跳躍ユニット内の推進剤が底をついたのだ。

『中佐！！』

「来るな伊隅！！貴様等はそのまま脱出しろ！！S-11の起動時間まで余裕がないんだ！！」

伊隅の不知火が、最後尾で停止した俺の所へ戻ろうとするが、俺自身拒否する。

「ファントムヘッドよりウォーリアーズ各機に継ぐ！！俺が殿を勤める。これから先には兵士級一匹通させやしない、安心して行け！！ラトロワ、退路を開け！！ウォーケンと沙霧は隊を統率！！！！これは“ファントムウォーリアーズ”としての最後の命令だ、全機速やかに離脱せよ！！」

『しかし！！』

「何度も言わせるな伊隅！！正樹！伊隅を連れてさっさと行け！！ジャール1、貴官へ指揮権を委譲する！全員の尻蹴飛ばして急がせろ！！」

俺は振り向き、迫ってくるBETAに向かって両肩に装備したGAU-8ガトリング砲2門と両腕のYF-23用試作新概念突撃砲XAMWS-24、バヨネット装備型突撃砲2門で全面の要撃級の脚部を破壊。

敵の侵攻を食い止めれる。

『……っ！！了解しました、大隊長！！ジャール1より各機、退路を開く！！後に続け！！』

『ハンター1了解!!ひよっ子共、ついて来い!!』

大隊各機が飛び立つ中、不知火弐型と不知火、スーパーホーネットが未だに飛び立って居なかった。

『なんだよ…ふざけんなよ!!あんたとは決着ついてねえんだぞ!!』

『駄目だ、急げユウヤ!!』

『そつだぞユウヤ少尉!中佐の想いを無駄にする気か!!』

『離せ、離せよコリンズ!響!!』

『中佐…!!』

「白銀か?…結局お前等4人のポーカーのツケはチャラになっちまったな」

『…くっ…うつ…』

「…行け…この世界は…頼んだぞ」

全ての機体が無事に門から飛び出し、安全圏へ到達したのを確認し、後ろを向いた。

其処には大小様々BETAが肉塊となり果てている。

そしてそのその後方からは新たなBETA群が近づいていた。

「潮時か」

- 生体認証確認

- 最終ロック解除

「まりも…今いくぞ」

自爆装置のボタンを握り拳で力強く叩いた。

反応炉と機体に装着されたS-11が光を放ち……全てを包んだ。

国連軍横浜基地香月夕呼副司令直属秘匿任務部隊“ファントムウォ

ーリアーズ”大隊所属

“神宮司春仁中佐”

2002年1月1日

オリジナルハイヴ攻略戦：桜花作戦にて殿を勤め、S-11を起動。
以後消息不明…

MIA（戦闘中行方不明）と認定。

反応炉破壊と殿を勤め、部隊の被害を最小限に留めた功績により、
2階級特進 - 小将となった。

1980年 8月10日

横浜 柊町

暗いトンネルを抜けるとそこには、のどかな街並みが伺えた。

オリブドラフ

OD色のジープの後部座席から見た景色は新鮮で、“1回目”の時、“祖国の外”はこんなに平和だったのかと思いたくなる程だったのを思い出す。

「どうかな？ 柊町を見ての感想は」

「…綺麗……ですね…こんなに綺麗だと…思いませんでした…」

「はっはっはっ、直に慣れるさ。…そう言えば“白銀”大尉、白陵基地には慣れたかい？」

「はい、御陰様で此方の生活にも慣れて参りました。“神宮司”少佐のご配慮に感謝いたします」

助手席に座っている茶色い短髪の男性が、“白銀影行”大尉。

元々は帝都守備連隊第一大隊の所属だったらしいが、新しく横浜白陵基地で戦術機甲大隊を一個大隊新たに編成するために引き抜かれたらしい。

白陵基地を出る前にシュミレータで訓練をしていたのを見学させてもらったが…なる程、凄まじい腕の持ち主だった。

そして黒い短髪の運転手が、“神宮司冬真”少佐。

白陵基地で編成される一個大隊を指揮する大隊長を勤める歴戦の猛者だ。

あの紅蓮大将…今は中將だが…に引けを取らぬ豪快な人物なのだそうだ。

そして今日から…俺の“義父”になった人だ。

「…“春仁”君、新しく家族が出来た気分はどうだい？」

「…まだ実感できません…でも…」

「…でも？」

「…不思議な感じです」

俺はそう答えると、再度窓の外へ視線を向けた。

今の俺の顔は…恐らく真っ赤だろう。

実際は凄く嬉しかった。

要するに…照れ隠しだ。

「そう堅くなるなよ“春仁”…っと、ついたぞ、今日からここが
前の家だ」

ついた先は、立派な門構えの“兵舎”だった。

………ん？

兵舎…？

「…ここ…兵舎ですよね…？」

「ああそつだ。よくわかったな。私達家族はここ、白陵基地の兵舎
の管理人もしているんだ。白銀君も此処に住み込んでいるんだ」

「因みに俺は一階の一番左の部屋だから、何時でも遊びに来るとい
い。歓迎するぞ」

「……………はい…」

（うおおおい！…ちょっと待てやコラ！…歴史変わってんぞオイ

！！俺の家一軒家だったじゃん！！然も白銀武の親父とか今までの記憶の中で一回も会ってないのに初日から…ってどういことったこれはあああああ！！）

そう、既にお気づきの方も居るだろう。

この俺、“神宮司春仁”はこの度、二回目の人生を体験している最中なのだ。

然も驚くことに、赤ん坊の頃から既に、前回のS-11で自爆した時までの記憶を継承してここに立っている。

意識が覚醒したのは1歳の時、その時から何か周囲の反応が最初と全く違うのに気付いてはいた。

そう、“気付いてはいた”。

大事な事なので二回言ったが…

「まりもく、美桜^{みお}く、帰ったぞおおく」

少佐が玄関を開けると、中には色とりどりの紙の輪で作った飾りを、顔の厳ついオッサン2人…が飾り付けていた。

「おお、神宮司少佐ではないですか」

「これはこれは、巖谷大尉に篁大尉ではありませんか」ズコッ！！
(コケました)

「…？どうしたんだ、春仁」

「なっ…なっ…」

(何でこの2人が…伝説のテストパイロットと有名な巖谷中佐と篁中佐が…まだ他にも居るんじゃないだろうな…)

そんなこんなでうなだれていると、奥からトコトコと駆けてくる足音がした。

「とーさまー…あうっ!!」

6歳位の朝顔の柄の着物を着た女の子…もとい、我が義妹まりもが目の前でコテンとコケた。

「う…うう…」

「…大丈夫？」

まりもに手を差し伸べる。

まりもは顔を上げて数秒の沈黙の後、手を取った。
因みに後ろでは

「うむ、ナイスフォローだ春仁!!」

「ほほう…」

「微笑ましいな…」

なんてオッサン達がほざいてます。

「…だあれ？」

「…えっと」

…なんて言えば良いんだろう。

…駄目だ。

何も思い浮かばない…

「まりも、先に挨拶しなさい」

「はい、とーさま」

そしてまりもはぺこりと頭を下げた。

「じんぐうじまりもです。よろしくおねがいします」

居間に通された俺は、だだっ広い居間の机に着いた。すると二階や一階の部屋から数人の衛士が降りてきた。

「みんなお待ちせゝさあ、たゝんと食べて頂戴」

台所から大量の料理を持ってきたのは、この「柊寮」の管理人である神宮司美桜さん。

俺の義母だ。

容姿は…まりもそのまんまです。

今思えば、まりもって母親似だったんだなあ…

「……まりもちゃん、誕生日おめでと〜!」「」「」「」

「ありがとうございます」

「まりも、誕生日プレゼント何が欲しいんだ?」

義父がまりもに尋ねた。

まりもはこう見えて子供の頃から謙虚だった。だから滅多に物をねだったりしなかった。

それをわかって、義父は聞いたんだろう。

「お兄ちゃんがほしいです」

「ハッハッハ！そう言うと思ったよ。春仁、挨拶しなさい」

（計りやがったこの義親父い！！はじめっからそのつもりかあ！！！！）

「ええと、神宮司春仁です。よろしく」

「今日から春仁がまりものお兄ちゃんだ。仲良くするんだぞ？」

その瞬間パアッとなりもの顔が明るくなり、飛びっきりの笑顔で喜んだ。

「よろしくね、はるにいちゃん」

「グハア！！！！（吐血）」

（反則だ…小さいまりもの笑顔がこんなに可愛いなんて…反則だろ！！！！！！）

こうして一日が足早に終わりを告げた。

そして波瀾万丈な人生が幕を開けた。

1・2回目の世界（修正版）（後書き）

筆が進まない

2・始動、そして前進（前書き）

途中で話が一気に飛びます。
あしからず

2・始動、そして前進

1982年7月30日

俺が此処『柊寮』に来てから早2年…

生活に慣れるまでには、対して時間は掛からなかったが…いくら8歳の餓鬼のナリをしていても、俺はもう一度衛士になって世界を救うという目標（2年前この家に来たとき決めました。）がある。だから今のうちに鍛えられるだけ鍛えておこう…と言うわけで、今日も朝から庭で、昔…実の兄に教わった近接格闘術を復習し、ナイフ格闘技の訓練をしていた。

「せいっ！！はっ！！…はあああ！！」

両手に、逆手に持ったナイフ2本を交互に前方へ振り抜き、そこから更に怒涛の連撃を放ち続ける。

突いては斬り伏せ、斬り抜いては蹴りを放ち、距離を取っては突きを放ち…

と言った感じに休む暇なく斬撃を放ち続ける。

「兄様、西瓜すいか食べますか？」

「はあ、はあ、…はあ、…ああ、そうだな。休憩を兼ねて一緒に食べようか？」

膝の外側に垂直にくくりつけた鞘に、ナイフを勢い良く仕舞って縁側に座る。

奥の居間からやってきたまりもは大きな皿に西瓜を切り分けて持って来ると、俺の隣にちょこんと座ってシャクシャクと西瓜を頬張りだした。

この西瓜は庭の一角に設けた自家製の畑で栽培した物だ。

今はまだBETAに侵攻されては居ないため、こうやって天然の西瓜を気軽に食べられる。

正に贅沢だ。

「…兄様、私にも武術を教えてください！」

「…！？げふっ、ごふっ…な、なんだいきなり…」

いきなりびっくりさせるなよ…お兄ちゃんせき込んだじゃっただろ。

「私も衛士になります。その為に強くなります！強くなって…衛士になって…父様と母様と…“大好きな”兄様の事を守ります！！」

……………。

まりもは曇りの無い澄んだ瞳で真っ直ぐ俺を見据えていた。

俺はこの目を知っている。

堅い意志と強い覚悟を秘めた目だ。

『お前達に何と呼ばれようが構わない…。
だが俺はクレイドルなんて認めない!!
俺は俺の…ORCA旅団のやり方で、人類の背負う業と罪を贖わせ
てみせる…例えそれが、数多の命を奪う行為であったとしてもな…
!!』

“ 兄さん ” と同じ目だ。

「 … 全く、適わないな… 」

「 … ？ 」

「 … やるからには、甘えは一切許さないし、手も抜かない。
… それにこの術技は本来 “ 人 ” を殺す為のモノだ。
… 本当に覚悟はあるか？
いざという時、人を殺す事が出来るか？ 」

まりもは押し黙った。

戸惑いの色を瞳に映しながら俯き、拳を握り締め、顔を上げた。
その時、既に瞳に迷いはなかった。

「 … やります!! 」

まりもは一息置いて力強く肯定した。

「 なら、俺の持てる総ての技術をまりもに叩き込んでやる。強くな
って、俺に追いついてみる 」

7月末… 本格的な夏が訪れる前の、涼しげな青天の下… 兄妹は共に

肩を並べて歩む事を誓った。

「さあ、という事で始めました第1回まりもちゃんを最凶&最狂の狂犬に魔改造しちゃおう大作戦（棒読み）」

「わーい」

「…とまあ、ふざけるのはさておき…何時も俺のジョギングと筋トレ一緒にやってるから、基礎体力には問題ない。早速型の習得から始めよう」

1時間後…（鳩時計の音）

「流石に飲み込みが速いな。もう型を習得するとは」

「えへへ、春兄さんの練習ずっと見ながら1人で練習してたんだよ？」

まりもがはにかみながらそう言った。

不覚ながらドキッとしてしまった…

落ち着け、落ち着くんだ春仁！！

今のまりもに手を出したら完璧犯罪だぞ！！

えええい！！

心頭滅却！！

我が心は水面に落ちる一滴の水滴の如し！！
見える！！私にも、明鏡止水の境地が見える！！

「…ふっふっふ、今なら“爆熱・神の指”を放てそうだ…」

「…兄様？」

更に1時間後（鳩時計の音）

「…よし、これで型の習得は終了だ」

「兄様、次は何をするんですか！」

まりもがワクワクした表情で俺の言葉を待っている。

「…終了だ」

「…え？」

「俺が教えられるのは此処までだ。此処から先は…まりも、お前自身の役目だ」

「ど、どういう事ですか兄様！！」

まりもが今にも泣きそうな顔で迫ってくる。

俺は手で制すると理由を教えてやった。

「まりも、この技術は人に教わるモノじゃない。…“自分で発展さ

せていく”モノなんだ」

「発展？」

「そう、この技術…俺はコマンドアサルトと呼んでるが…コマンドアサルトは1対1、並びに1対多の戦闘、敵の無力化、友軍援護など…様々な状況下で有効性を発揮するように型から独自に発展させる形態を採っている。つまり…」

「状況に応じた技や攻撃を自分で発展させていく事で…自分なりの戦い方ができるという事ですか？」

「物分かりがいいな。」

つと、母さん達が帰ってきたかな…。

練習は毎日付き合ってたやう。

組み手もだ。続きはまた明日な」

「はい！！…母様〜！」

まりもが元気よく玄関へと駆けていく。

「タイムリミットは後…19年か」

一抹の不安と期待、焦りを覚えながらも、世界に残された時間は無情にも過ぎ去っていた。

10年後

1992年 4月6日

日本帝国陸軍白陵基地
衛士訓練予備学校

「あゝゝゝつ、退屈な上に暇だ」

俺は割り当てられた机の上に突っ伏した。

「兄さん、入隊早々そんな事言わないでよ」

「仕方ないだろゝ、入隊式はまだいい…けど教室に放置は無いだろ。
なあ、みんな」

「一利あるわね」

「全くだぜ」

「あゝ、暇!!」

何故、俺達がこんなに倦怠感に見舞われているかというところ…実は教官がいつになっても来ないのだ。

因みに入隊式終了後各種説明等を受ける為、この教室に案内されたのだが…1時間たっても教官が来ない。

来る気配も無い。

「此処のようだな」

「その様ですね」

「…あ？…んな！？」

ガタッ…バタン…！！

教室に男女2人組の訓練兵が入ってきた時、俺は素つ頓狂な声を上げて倒れてしまった。

「だ、大丈夫…？」

「痛てえええ…」

「…の、ようだな。驚かせてすまない…“沙霧尚哉”だ、宜しく」

「“駒木早由利”です。宜しくね」

ドゴスッ…！！

机に頭がめり込んでます

（何でこの2人が…この2人確か俺より歳下だったはずじゃ…）

「じ、神宮司春仁…だ」

「神宮司まりもです。…兄が失礼しました…」

「あら、兄妹だったの？」

「血は繋がっていないが…れっきとした兄妹だ」

「そうなのか…」

ガラガラッ

「サツサと席に着け、バカ野郎共が」

ズドゴスッ！！！！

頭が机に埋まりました

「相変わらず五月蠅い奴だな、お前は」

「なっ、なっ…」

何でこいつが…

『存外、甘い男なのだな…お前は。
まあ、そんな傭兵も悪く無いがな』

『そして人は、揺り籠で空を飛び続けるか…お前の答えだ、私はそれで良いさ』

嗚呼、畜生…

懐かしい…この声に何度助けられ、何度導かれたことが。

「…久し振りだな、セレン・ヘイズ」

「今は、霞スミカだ。逢いたかったよ…“リンクス”」

セレンが手を差し出した。

俺も手を差し出して、彼女の手を握っ…

スパァン！！

た所で蹴りが来た。

「はっ！！」

俺は左足で体を捻って蹴りをかわし、離れた右手を素早くセレンの顔面に叩き込んだ。

「甘いな！！」

然し左手でガードされ、右足のハイキックを喰らい、互いに距離を取った。

「………（汗）」

「腕は落ちていないようだな」

「当たり前だろ？身体が資本なんだ…軍人も“傭兵”も、な」

こうして、波乱に満ちた訓練兵生活が幕を上げた。

2・始動、そして前進（後書き）

はい、沙霧大尉と駒木中尉の登場でした。

2人ってまりもちゃんより歳下…だったような…
わかる人は連絡下さい。

3 ・変革は唐突に（前書き）

まりもちゃんかわええなあ
…

3・変革は唐突に

気がつくと、目の前は真っ白な砂漠だった。

空は透き通った蒼で、まるで吸い込まれそうな感覚に見舞われる。

周囲には撃破されたACや戦術機が、朽ちることなく…一種のオブジェのように乱立している。

その巨大なオブジェの間を進んでいくと、小高い丘に着く。

その丘にはただ1体だけ、この地平の果てまで続く墓場を見下ろすように片膝をついて跪く機体しか居なかった。

A-10C「サンダーボルト?/C型」

俺と共に、幾多のBETA戦線を駆け抜けた“第2”の相棒。

右肩には“ファントム・ウォーリアーズ”の部隊章である、紅い目をした黒い戦術機が捧げ刀をしているエンブレム。そして左肩には、“鴉の羽”をくわえた、片方に“首輪”をつけた2つの頭を持つ“狂犬”のエンブレム。

そしてサンダーボルトの足元には、血に濡れたドグタグの掛かったアサルトライフルが一丁。

まるでサンダーボルトがそのライフルを守っているかのような風景だ。

俺はそのライフルに掛かった、血に濡れたドッグタグを手にとって裏返した。

birthday: 8 / 10

name: 神宮司 - - -

名前は… かすれて、誰か分からなかった。

けど

涙が止まらなかった

1992年8月1日

「…う、あ…？」

（またあの夢か…）

意識が覚醒していくにつれて徐々に記憶から薄れていく夢の内容は、既に頭の中から大部分が欠落していた。

“ 身体が重い…”

起床ラッパまではまだ時間がある。
シャワーでも浴びて気分転換しよう。
と、上掛けを退けようと手を掛け…

ふによん

………た…？

ふにゆふにゆ

あれ…

こんな柔らかい、マシュマロのような物ベッドの中に有ったっけ…？

ってか…

なんか今日はやけに

“ 身体が重い…”

とか思いつつ、手にしたマシュマロのような物体の手触りや感触を
堪能したりする。

（しかし、こんな物ベッドに持ち込んだ記憶無いんだけど…）

ふにゆんふにゆん

「…はあ…、んあ…」

…あれ？

……イマ…

声ガシタヨウナ……？

恐る恐る頭を上げると案の定、まりもが俺の上で寝ていた。

俺の右手が、その豊満に実った胸を鷺掴みにして…

「兄さんったら…朝から大胆…なんだから…／＼／＼（ぽっ）」

「まりもさん…朝っぱらから人の上で何をしているんでしょうか…
此处、あなたの部屋じゃないですよ？ってか何で俺の上で寝てんの」

「折角起こしに来てあげたのに…兄さんのいけず／＼／／」

「いやだから、何で俺の上で…」

バンッ

「おはよう、喜ベリンクス。今日は私直々に起こし…てえ…」

嗚呼、なんか今日は運が無いんだな…俺。

「…神宮司まりも訓練兵、“私の”リンクスに何をしている…？」

「あら、何を言っているんですか霞教官。“私の”兄にスキンシップをしていただけですが…何か、問題でも？」

そう言っただけで睨み合う2人の背後に、真っ黒なオーラが噴出していたのはご愛嬌だったりする。

起床ラッパの音で部屋の外に出て点呼を取る。
その後はPXで朝食だ。

俺はまりもと一緒にPXへ向かった。

「ふあゝあ…おう沙霧に駒木、おはようさん」

「ああ、おはよう」

「おはよう。あなた達もPXに行くの？」

「ええ、一緒に行きましょう」

途中、同期の沙霧尚哉と駒木早由利に合流して、そのままPXへ入っていく。

「あらおはよう。全くアンタ等は本当に仲が良いわねえ」

カウンターの向こうで合成食を料理している我等が食堂のおば…お

姉さんである京塚志津江曹長30歳が声を掛けてきた。

「あつたり前だろ、俺達は“第207訓練小隊A分隊”の戦友だぜ？特に沙霧と駒木には、安心して背中を任せられるからなあ」

「ちょ…兄さん！！私じゃ安心出来ないって言うの！？」

「お前は前衛以外だとはいはいオーバーラップするから安心出来ないんだよ！！」

「まあ抑えろ、春仁」

「まりもちゃんも抑えた抑えた」

顔を突き合う俺とまりもを、沙霧が俺を羽交い締めにし、駒木がまりもを後ろから拘束する。

「……ぷっ、あははははははっ」「……」

こうして衝突する事が些細な事なら、仲直りする事もまた些細な事だ。

「本当にアンタ等は仲良いねえ…で、何食べるんだい？」

「……合成豚角煮定食！！」「……大盛で！！」

朝食の後はブリーフィングルームでセレンを交えての朝礼。
此処で1日の座学内容や訓練内容を確認し、その後教室やグラウンドに向かう。

因みに今日の最初の訓練は10キロ行軍だ。

「よし、全員終わったな。次はケージにある装備で10キロ行軍だ」

「『『『了解』』』」

10キロを完走し、4人でケージに入って装備を装着する。

沙霧と駒木は軽く肩で息をしていたが、まりもは息がほんの少し荒れただけだった。

とやかく言う俺は余裕綽々ですが。

「リンクス、お前は完全装備だ。ついでに分隊支援火器と対物狙撃銃…あとミニガンも持って行け。ああ、ロケットランチャーも付けよう」

「『『…え!?!』』」

「ああ、いいの?《ジャコツ》いや、完全装備だけだと《ガチャガチャ》軽過ぎて訓練に《ジャララララ…ガッチャン!》ならないから《スチャツ》困ってたんだ…《ジャキンツ》よつと!!」

完全装備の上から、背中にミニガン用給弾ラックを背負いその左右側面に分隊支援火器と対物狙撃銃をマウントし、腰に伸縮式ロケツ

トランチャーを2本つけ、手にはミニガンを持ってケージを出た。

「じゃ、お先」

ズドッ、ズドッ、ズドッ…

「…え…（汗）…」

行軍訓練の後は教室で座学だ。

今日は各種作戦に置いての役割分担や、施設の占領、サバイバルなどの方法についてだ。

「…以上が、可食可能な植物だ。但し、クワの実は非常に強い緩下剤（かんげざい：腹下し）の効果が、マンガーは毒ツタに過敏な者に激しいアレルギー反応を起こす作用がある。この点に留意しろ」

もう直ぐ夏の総戦技演習があるため、皆必死だ。

だが俺にとっては越えられて当然の試練でしかない。

曲がりなりにも10年以上衛士として戦ってきたんだ。

パス出来て当たり前。

逆に此处でいい成績を残せば、俺達4人の任官を早める事も出来る。

そうすれば九・六事件や光州作戦にも万全の状態で見守る…もっといい結果へ導く事が出来るかも知れない。

ならやることは一つ。

最速タイムでクリアし、戦術機教習を終わらせる。そして…

（ファントム・ウォリアーズのメンバーを片っ端からかき集める、先ずは香月夕呼に接触しないと…）

当面の目標を定め、俺は座学に集中した。

「久しぶりねえ、神宮司“中佐”？」

「……………なんでさ」

目標も新たに頑張ろうとした矢先に…

まさか目標の一つを速攻でクリアしてしまうとは…。

「…で？お前は“ループした”香月夕呼でいいんだよね？」

「ええ、此処に来る前に“寄り道したけど”」

現在地は帝都大学のとある一室。

何でも父親が応用量子物理研究の第一人者で、その関係でここに入りしているらしい。

「で？話つてのはなんだ」

「その前に、会わせたい奴が居るわ。…入って」

ドアを開けて入ってきたのは、国連軍のC型軍装を着た士官だった。階級から准将だとわかる。

「久し振りだな、“レイヴンの片割れ”」

「…その声…シェリング!？」

俺の元居た世界の住人…アルドラ社のオリジナルNo.14、クリティークを駆るリンクス“シェリング”その人だった。

「…どういうことだ？セレン・ヘイズ…いや、霞スミカにしるシェリングにしる…特にシェリングは俺と兄さんが撃破したはずだ…！」

『やはり伝説は…伊達では無かったか』

俺達は確かにあの時撃破したはず…

「セレン・ヘイズから何も聞いてないの？“連れてきたのよ”」

「連れてきたって…」

「まあ、信じられんのも無理はない。…なにせ、ほぼ半数以上のレイヴンとリンクスが向こう側で“生きている”のだからな」

「ああ、あと…あんたの“兄貴”から伝言があるわ」

「……………な……………」

みんなや兄さんまで…!?

俺は愕然とした。

夕呼の説明で全てを知った。

彼等が生きている。

ジャック・Oが、エヴァンジェが、ベルリオーズが、レオハルトが、テルミドルが、ウィン・D・ファンシヨンが…
力を合わせて戦っていると言っではないか。

そして兄さんさえも…

「…なんて言ってた」

「…ストレイドは餓別だ、今度みんなで一杯やろう…だってさ」

「ははっ…あの馬鹿兄貴…」

話が一段落ついたところで、今後の動きについて話し合った。

「…だから、俺的には1日でも早く任官して未来を変えたいわけだ。光州作戦は特に…」

「まあ何であれ、あんたの任官を早める利はあるわね…なんとかならない、シェリング」

「ふむ…ではネオニダスに相談してみるか。さっき呼んだ、すぐ来るだろう」

「えっ？…銀翁までいるのか！？」

ガチャッ

「おお、リンクスではないか。貴様も来ていたか」

「…おいおい、よりによって帝国軍の将官かよ」

銀翁もシェリングと同様に軍装に身を包み、襟には少将の階級章がついていた。

「ネオニダスよ、先の件はどうなった」

「心配するでない。リンクスの所属する訓練部隊は総戦技演習終了後、1ヶ月半で任官しオルタネイティブ4直属の部隊に配属する。それまでは第3世代機開発主任として新型機開発計画、耀光計画に参加してもらう」

「九・六作戦と光州作戦には参加出来るのか？」

「現状では難しいな。光州作戦には駆り出されるだろうが…それに、あまり未来を変えるのは我々にとっては好ましくなろう？」

俺は「確かに」と頷いた。

前回の世界で聞いた話だと、白銀武と言うファクター（因子）が未来を変えたのが原因で横浜基地防衛戦や、12・5事件が起きたと聞かされている。

九・六作戦は無理か。

「…わかった。シェリング、銀翁、俺が任官したらサンダーボルト？を1機頼めるか」

「む、ストレイドには乗らんのか？」

「此処にコジマ粒子撒き散らす訳にはいかないだろ？」

「ああ、その点なら心配ない。向こうの世界の、グリーン・ホーンなどの技術屋連中と香月博士、それとアブ・マーシュがコジマ汚染を抑制する装置とシステムを開発、実装している。プライマル・アイマーを常時展開しても、アサルトアイマーを連続で放つても、全く環境に影響しない」

「…嘘だろ？」

「本当だ。私のクリティークと共に保管してある。必要になったら言ってくれ」

「……………」

なんて奴らだ…

俺は愕然を通り越して呆れ果てた。

夜、教本を読み漁っていた俺は、消灯時間ギリギリにベッドに入った。

「今日は疲れたな…全く」

然し収穫もあつた。

今後の目標も出来た。

「まりも…今度は、必ず…」

前の世界で、目の前で喰い殺され…隣の部屋で寝ている義妹へ、堅く誓った。

一方隣の部屋では…

真つ暗な部屋の中に、突如眩しい光がベッドの上に満ち溢れた。

然しこの部屋の主は全く気付かず寝息をたてている。

光は徐々に薄れていき、また真つ暗な元の部屋に戻る。

「…ん…うつ…うつは…」

頭が重い…

何か、大量の情報を無理やり詰め込まれたような…

ズキッ

「痛つ…な、なに…これ…九・六作戦…光州作戦？…第4計画…
夕呼？…207小隊…白銀！春仁中佐…え、兄さんが中佐！？」

部屋の主…神宮司まりもは頭を抱えてうずくまった。

そして痛みが退くと電気をつけ、自分の身体が18歳の頃に戻っていること、カレンダーを見て今が1992年で有ること、クーデターを起こした沙霧大尉と同期であることに驚いた。

「私は…確かあの時白銀少尉と話して…何かに頭を…！？うつ…！
」

あの時の頭を何かに潰される感覚を思い出し、吐き気にみまわれる

が、なんとか押さえ込む。

「私は…過去に戻ってきたとも言っの…!!？」

神宮司まりも“軍曹”はこの時、自分が時間を逆行したのだとようやく認識したのだった。

3・変革は唐突に（後書き）

さて、まりもちゃんループさせちゃいました。

因みに九・六作戦を飛ばしたのは…結果は知ってるけど内容がわからないからだ（キリッ

主人公機をサンダーボルトにしたのは作者の趣味です。

サンダーボルトと撃震大好きです。

4・“亡霊戦士”、覚醒の兆し（前書き）

長くなっちゃったZ.E…

4・“亡霊戦士”、覚醒の兆し

side:春仁

晴天の下に広がる市街地。

その市街地の中に、球体のような物体が幾つも浮遊している。

撃震の跳躍ユニットに火をつけ、ジェットエンジンを噴かせる。

網膜投影ディスプレイに球体群を捉え、両腕部に装備した87式突撃砲のトリガーを引いた。

球体に吸い込まれるように36mm弾が着弾し、球体が爆散する。

尚も球体群は増えていき、周りを取り囲まれてしまう。

「やっぱり87式は軽過ぎるな…取り回しは合格点だが24型(XAWS-24。第1話で使用)の方が重くて狙いやすいし…」

87式突撃砲を投棄して、両腕のナイフシースから65式近接戦闘短刀を引き抜く。

「壱の型…“月下雷鳴”」

一閃。

必要最低限の刃の取り回しと、撃震の限界機動ギリギリの動きで球体群をものの30秒で破壊し尽くした。

『状況終了、動作教習応用課程Dを終了する。リンクス、さっさと降りてこい!!』

1992年8月20日

横浜 帝国軍白陵基地

セレンに渡された紙にでかかと書かれた、人生で2度目になる適性検査試験、そしてその結果…。

結果：SS+…

つまり -

測定不能だった。

「…お前は本当に人間か？」

「…頼むからその痛い物を見るような目を辞めてくれ、尚うち」

「な、なおっ!？」

「強化装備を“着ないで”乗った上に何食わぬ顔であれだけの機動を見せつけて平然と立っていられるだけで充分痛いわよ…」

「駒ちゃんまでっ!!!？」

「駒ちゃん!？」

そう、今の俺の格好は衛士が着る強化装備ではなく、BDUと呼ばれる迷彩柄の野戦服に、ヘッドセットと脚部コネクタプロテクターのみである。

俺は元々ネクストに乗っていた為、戦術機程度のGは既に許容範囲内…いや、毛程にも感じない。

それ以前にこの程度の揺れは、揺れに入らない。
まだノーマルの方が揺れる。

「まりも、お兄ちゃんを慰めな」無理です」…うつうつ…」

「…それでは、先に行くぞ?」

「私もそうします…」

そう言つて沙霧と駒木がPXへ歩いていった。

「…さて、話して貰おうか…神宮司“軍曹”?」

「…えっ!？」

「何で…って顔してるな?そりゃわかるさ…貴官のあの機動や癖…
本当なら今日初めて乗る筈なのに、戸惑いや不安によるバイタルの
変化が見受けられなかった。さらに言うなら俺も“ループ”してる
ている。…自分の義妹を見分けるくらい造作もない事だ」

「本当に、中佐なのですか…?」

「今は中佐じゃない…訓練兵だ。そう固くなるなよ、まりも」

「…まったく、兄さんには適わないわね。…兄さんの読み通り、私は“ループ”して来たの。…自分でもびっくりしてるわ」

まりもは観念したように表情を和らげ互いの事を語り出した。

その際、自分が兵士級に頭を噛み砕かれて死んだ事。

横浜基地防衛戦の事。

桜花作戦で只1人自爆し、味方を護って死んだ事を話した。

シヨックな内容ばかりでまりもは黙り込んでしまったが、そこは歴戦の衛士。

モチベーションを持ち直し、今後についての話に話題は移った。

「じゃあ私達以外には夕呼がループしてるの？」

「ああ、あと国連軍のシェリング・ノースロック准将に霞スミカ教官、帝国軍の沢渡銀蔵少将…俺達は銀翁って呼んでるが…この3人が夕呼が連れてきた俺の知り合いだ」

「霞教官はまだしも、後の2人はなかなかすごい人達ね…あつ、九六作戦はどうなるの!？」

まりもは思い出したように問いただしてきた。

「残念だが、今回は参加できない。俺達はこの後、異例の速度で任官して第4計画に配備されるまで、帝都で第3世代機開発計画、耀光計画の開発主任に抜擢されることになる」

「そんな!？」

「…なるべく歴史を改竄する事は出来ないって言う夕呼やシェリング達の判断だ。…わかってくれ、とは言わない。だが、今歴史を変えるべきではない事は判ってくれ」

まりもは俯いて齒を食いしばった。

無理もない。あの戦闘で自分の同期や専任を殺されて、たった1人生きて帰って…出来る事なら…否、是が非でも変えたい未来だろうが、そこはグツと我慢して貰うしかない。

「…わかったわ。私も軍人、任務や指令に私情は挟まない」

「…助かる。…そういえば、今年は飛鳥計画の始まる年だったよな…」

「ええ、確か…瑞鶴に替わる斯衛軍主力機として、武御雷を設計・開発した計画だったはずだけど…それがどうしたの？」

「いや、巖谷のおっちゃん達元気かな」と思ってたさ」

「ああ、巖谷大尉に篁大尉ね」

以前はちよくちよく会いに来てくれていたが、軍務が忙しらしく、暫く会っていない。

「帝都に行ったら会うかもな…」

俺とまりもは霞に外出許可と2日間の休暇を貰うと、久し振りに柊町に出た。

まりもを夕呼に会わせる事にして、セレンに連絡を頼み帝都大学に向かった。

大学の一室には、既にシェリングと銀翁、夕呼が集まっており、まりもと俺を含めて議題を移した。

「…あんだ達の任官まであと20日を切った今、急ピッチで春仁へ配備するA-10をシェリングが呐喊で改修中よ。各アビオニクスとOSの書き換え、主腕部内部強度強化とモーターブレードの装備、その準備が出来たら春仁の要望にあった“AMS・QB搭載型TS A（戦術歩行攻撃機）”への改良を行うわ」

「…兄さん、AMSって何？」

「AMS…アレゴリー・マニピュレート・システムの略だ。脊髄に特殊なコネクタを接続する事で、脳と機体を直接リンクさせ、機体を制御する搭乗者が、イメージした動きをダイレクトに反映させることで操縦性と即応性の大幅な向上と独特の機動を可能にした画期的なシステムだ…ただ、このAMSには適性があつて、然も先天的な要因でしか芽生えない。つまり乗り手を選ぶシステムだって事だ。それに付け加え、接続時や機体に負荷が掛かると強烈な痛みを感じ

る等が挙げられるが、命に関わるような物じゃないから、対した問題にはならない」

「画期的だけど…使い勝手が悪過ぎるわね…QBは？」

「機体各部に取り付けられた、AMSを用いて統合制御し急加速する小型緊急用ブースタだ。噴射時間は1秒にも満たないが、瞬間加速速度は時速1000〜2000kmに達する。生身で使えば…100%新種の軟体生物が出来上がるだろうな」

「……」

まりもは馬鹿げたスペックに呆れて黙り込んでしまった。

然し問題は山積みだ。

まず、既存の戦術機がネクストの技術に耐えられるか否か…。

前回の世界で俺が発案したこの開発計画は、技術母体となるネクストもなく、尚且つ桜花作戦に間に合わせる時間も無かった為、夢のまた夢になってしまった。

然し、此処にはストレイド、月輪、クリティークの三機がある。

技術母体があれば、拡張性の高いF-4やA-10、さらには拡張性皆無の不知火の強化さえ可能になる。

「かの国」…いや、世界中の連中は、さぞかし驚くだろうな…我々の力に」

「暴れるなよ、ネオニダス」

「この分じゃ無理だよ、シェリング。…ああそうだ、夕呼に頼みが

あるんだが…」

俺はあることを思い出し、夕呼に話を持ち掛けた。

「なによ、下らない事だったら承知しないわよ？」

「社を接収するときに、何人か一緒に連れてきてほしい奴らがいるんだが…」

夕呼は顰めっ面をしていたが、思い出したように笑みを零した。

「ああ、あの“3人”ね」

「イジー・サンダーク、クリスカ・ビーチエノワ、イーニア・シエスチナ…クリスカとイーニア、社は実質俺の“妹”だし…サンダークは衛士の中じゃ一級品、小隊指揮官にしちやいい腕してるしな…」

「特にクリスカとイーニアはあんたに懐いてたしね」

ここで言うのもなんだが、俺は日本の生まれではない。

ソビエト連邦のオルタネイティブ3にて生み出されたESP発現体…その“第1世代最後の生き残り”だ。

第1世代はESPの能力向上と共に、肉体強化も主眼に置いた世代…らしい。

「…然し、それだけの凄腕を先方が手放すとは思えんが…何か策はあるのか？香月博士」

「…無い…訳ではないけど…はつきり言って使いたくないわ」

夕呼は苦い顔をして顎に手を当てた。

「ネクストの技術…もしくはネクストの技術を使った新型機…これが妥当かしら…」

「…厳しいな。ネクスト戦力は光州か本土侵攻まで秘匿しておきたいのだが…」

「…我等に余り時間は残されてはおらぬ。リンクスの言うジャーラ大隊や第66戦術機甲大隊の件…アルゴス試験小隊にブラックナイヴズ、ウォードッグ小隊…ファントムウォーリアーズを再編するには彼等が必要だ。…ただ、儼もネクスト…いや、コジマ技術は無難ではないと思うがな」

机の上にあつた資料を読んでいたまりものをぞく俺達4人は唸った。

「ねえ兄さん、ノーマルって私にも乗れるかしら」

「…ん？ああ、機動力なら第3世代並み、総火力ならサンダーボルト？並みだからな。扱いは通常と違って難しいが、戦術機とは比べ物にならない程ジェネレータが優秀だ、か……………ら……………つ！！ノオオオオオノーマルだあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「……………はい？」「……………」

閃きました。

ああ、閃きましたとも！！

頭の中で豆電球が灯りました！！！！

そうだ、なにも“ネクストに”こだわる必要はないんだ！！

「ノーマルだよ、ノーマル！！ノーマルのジェネレータを量産して戦術機に転用させるんだよ！！元々レーザー兵器に対応するために作られたシリーズだ：“今現在”レーザー兵器を配備する予定は無いが、それを補っても有り余るほどの出力が期待できる！！それと一緒に水素吸着合金製の装甲と水素燃料を使うロケットエンジンの跳躍ユニットを開発して換装すれば…撃震なら最大5時間の連続長距離飛行が出来る！！」

「な、なんと！！」

「そうか、ノーマルがあつたか！！」

「そうよ…それなら行けるわ！！！前の世界でノーマルは研究済みだから、必要な施設と環境があれば…レーザーブレードなんかも再現可能に！！」

「……は、はは、ははははははははははははははははあ！

！最高にハイって奴だああああああああああ！！！！」

「……………（汗）」

その後俺達は、狂喜乱舞しながら設計図を書きまくり僅か1時間で仕上げ、銀翁と共にその足で帝都の陸軍兵器廠第壱開発局へ赴いた。

銀翁の伝手で面会を承諾してもらい、応接室に通された。

「さて…食いついてくるかのう」

「微妙だな…まず生産ラインを確保しなきゃならんし…今は武御雷に掛かりつきりだろうしな…」

コンコンッ

応接室の扉がノックされ、懐かしい顔が入ってきた。

「お待ちせいたしました、少将殿。帝国陸軍兵器廠第壹開発局副部長の巖谷榮二少佐であります」

「うむ、済まないのう。貴重な時間を割いてしもつて…」

「その様な事はありません。我々にも息抜きは必要ですよ…ん、君は…」

「御久し振りです少佐殿。帝国陸軍白陵基地第207衛士訓練小隊A分隊分隊長の、神宮司春仁訓練兵であります！」

「…おおっ！！神宮司大佐殿の！！元気だったかい？」

「はい。義妹のまりも共々、帝国の…いえ、人類の未来の為、日々訓練に従事しております」

互いに挨拶を交わし、本題に入った。

俺はトランクからファイルを取り出し、巖谷少佐へ差し出した。

少佐は俺が発案したと聞いて半信半疑だったようだが、ファイルの中身を見ると目を見開いた。

「……こ、これは…いや、しかし……」

「お気に召されましたか？ 巖谷少佐殿」

side：巖谷

私は手渡された資料に目を通し、我を疑った。

「……こ、これは…いや、しかし……」

「お気に召されましたか？ 巖谷少佐殿」

彼…春仁君は自信有り気な笑みを浮かべ、そう言った。

確かにこれは画期的だ。

現在開発中の水素吸蔵合金とは違い、何度使用しても劣化しない。その上、強度は1.5倍以上な上に軽量…。

そして私の目を奪ったのは、この撃震用に構想された新型跳躍ユニットだ。

現段階で既にF-15J「陽炎」を…いや、現在開発中の第3世代並みの推力と燃費…そして新型の水素をもちいるジェネレータの圧倒的な主機出力…。

「春仁君、これを君が考えたのか!？」

「いいえ、元々は此方の沢渡少将殿、そして帝国大学の香月博士の考えた物に私流のアレンジを加えたに過ぎません」

「……………」

私は暫く声が出なかったが…此処で1つ疑問が浮かんた。

「…何が目的かね…?」

「日本帝国の…いえ、総ての人類の勝利…この地上からBETAを一掃出来るなら…私は何も惜しみません。…そのデータは総て少佐殿へ寄贈致します。好きなようにお使いください。…但し」

「なにかね」

「…国内でのみ使用を許可します。国外への…特に“かの国”への技術流出は避けてください」

願ってもない好条件だった。

私は要求を受け入れ、早速現在開発中の試作機へ導入するために議会へ提出用のレポートへしたためるために、彼等と別れて部屋を後にした。

side：春仁

「いい具合に食いついてきてくれて助かったよ。まりものお蔭だ、ありがとう」

「そ、そんな事……ある……かな／＼／＼」

俺とまりもは夕呼達と別れ、実家である柊寮へ向かっていた。

途中、ある公園に行き着き、これまた懐かしい人が入るのを見つけた。

「白銀大尉殿！」

「ん？…ああ、春仁君にまりもちゃんじゃないか！久し振りだね。元気だったかい」

「はい、大尉殿もお変わりないようで」

影行大尉は、「来週から少佐だよ」とはにかみながら答えた。

「訓練は順調かい？」

「はい、後1ヶ月程度で任官だそうです」

「そうか、早いもんだな……」

大尉も…話に聞くと、もう少佐らしい…今日休暇を貰い、家族サービスに勤めているらしい。

そうしているうちに、遠くから七歳ぐらいの男の子が走ってきた。

幼い顔立ちだが、あの顔を見間違える筈がない。

「父さん、何し…て…えっ？」

「…君が武君かな？俺は…」「中佐？」「…え？」

運命は加速する。

世界の因果から漏れ出した彼等…

ファントムウォーリアー（亡霊戦士）を中心に。

4・“亡霊戦士”、覚醒の兆し（後書き）

さて、此処からサンダーボルトのコジ魔改造が始まります！！

まあそれはさておき…次回も一気に時間が飛びます。あしからず…

5 任官、そして“渡米”（前書き）

長いです。

つかれた。

5・任官、そして“渡米”

side：春仁

1992年9月10日

帝国陸軍白陵基地

「以上、207衛士訓練小隊A分隊、解散！」

「「「「ありがとうございました！」」」」

体育館から出ると、霞が沙霧と駒木に激励を送っていた。
2人とも涙腺が崩壊したみたいに涙が駄々漏れだ。

「引き続き、配属先の部隊を通達いたします故、ブリーフィングルームへお越しく下さい、少尉殿」

「…なんかセレンに敬語使われると調子狂うな…」

沙霧と駒木がブリーフィングルームへ向かった後、俺とまりもは霞に呼び止められて、敬語で話し掛けられた。

物凄く、むず痒い。

「安心しろ、貴様とは今まで通り接してやる…なにせ、“私のリンクス”なのだからな」

「…霞軍曹、聞き捨てなりませんねえ…“私の兄さん”を私物化する

るなんて…」

「ほう…いい度胸だな、小娘が。私に喧嘩を売ったこと、後悔させてやるからな!!」

「望むところ!!今までの借り…きつちり返してやるわよ!!」

ゴツ!!

2人の額がぶつかり合い、全身からドス黒い邪悪なオーラが噴出した。

「……先に…行くぞ?…」

このままだと巻き込まれそうなので…逃げます。

クソっ…まさか俺も恋愛原子核ブラザーズのタケルやユウヤに感染させられたか!?

冗談じゃねえ!!

まったくもって冗談じゃねえぞ!!

タケルならまだしも、まりもの新技『確率分岐世界の鏡純夏直伝どるみるきいシリーズ』なんて喰らった日にゃ、エーレンベルク無しでアサルトセルを生身で落とせちまうわ!!

全速力で走る中、背後から響く破壊音に、軽く心が壊れそうになった。

「では、これより配属部隊の通達を行います。…神宮司春仁少尉、神宮司まりも少尉、沙霧尚哉少尉、駒木早由利少尉、以上4名は…本日、現時刻をもって帝国陸軍白陵基地所属、沢渡銀蔵少将直属の特務任務部隊へ配属、並びに帝都で行われている耀光計画の主席顧問^{バイロット}開発衛士に任命、神宮司まりも少尉、沙霧尚哉少尉、駒木早由利少尉の3名は直ちに帝都へ出頭されたし。神宮司春仁少尉には、直ちに“アメリカ”へ渡米されたし…とのことです」

「…え!?!」

→沙霧・駒木

「…ああ、サンダーボルトの予備パーツの件か。ファイアチルド社だったな…たしか」

「帝国ではまだ調達・製造、それ以前にライセンス取得すらしてないから…しょうがないわね。こればかりは」

俺自身、アメリカへ行く事に不満は無いのだが…如何せん行ったことがないから土地勘ゼロだ。

誰か“案内役”が欲しいところだが…アテはない。

「迷子だけは…絶対嫌だ」

「ああ、その点は心配ない。銀翁が助っ人を用意している。…これだ」

そう言つてセレンは小脇に抱えていた書類の束からファイルを1つ引き抜くと、開いて渡してきた。

「えゝつ、なになに…名目上はシェリングの護衛か…国連軍からは歩兵1小隊、帝国軍からは3人、俺と…白銀影行大尉と…国崎“雄^{うや}哉”大尉…ん？どつかで聞いたような名前だな…」

「その大尉、なんでも相当な親米家らしい。国崎大尉は由緒ある武家の家柄…斯衛で言う赤の家でありながら、斯衛軍を蹴った上に、アメリカへ渡つて米軍の戦術を身に付けたいらしい。武家の出身には珍しい柔軟な思考を持っている」

「今時珍しいな…つと、出立日は…………は？」

「ああ、言い忘れていたな。出立日は今日、これからだ」

…なんですと？

2時間後 アントノフAn-225 ムリヤ機内

人っ子一人いない空っぽの機内の硬い座席に、疲れ果てた我が身を沈めた。

あの後俺は、アメリカへ持つて行く私物の整理と移動を1時間で済ませ、離陸時間ギリギリで滑り込んだ。

何というか、人間の限界を垣間見た気がする。

「君が神宮司少尉かい？…俺が国崎雄哉、階級は大尉だ。よろしく」

「はっ！よろしくお願い致します、大尉殿」

「ははは、そう硬くなることは無い。もっとリラックスしたらいい。アメリカについたら、俺が案内をする事になる。それまでは、ゆっくり休んでくれ」

そう言つて国崎大尉は、紙コップに入つた合成コーヒーを俺に渡して通路を歩いていった。

「…やることないし、睡いし…寝るか…」

ゴソゴソ…

（ち、“中尉”、狭いです！！）

（五月蠅いぞ“少尉”！！“大隊長”にバレたらどうする！！）

（んな、むちゃくちゃな！！“中尉”もなんとか言ってくれよ！！）

（うめ…も……無理…）

(…はっ！？中尉……………!!)

更に5時間後

アメリカ・ノースカロライナ州

フェアチルド本社

「…このトレーラーで最後です。では、此方にサインを」

「…これでいいかな？」

「はい。…では、直ちに輸送機への搬入作業に入ります。作業終了には2日程度掛かります」

「失礼、神宮司少尉とはあなたの事でしょうか？」

「そうですが…なにか？」

サンダーボルトの予備パーツ3機分を納入し、シェリングがサインをしていると、脇にいた陸軍の軍曹話しかけてきた。

「実は…陸軍から緊急の演習に参加して欲しいと通達がありました…」

「アメリカ陸軍直々に、ですか」

「いえ、実は神宮司少尉と戦いたいと申し出た衛士が2名居りまして…此方のフェイアチルド社にある演習場であれば使用して構わないと担当者が許可を下ろしたので…どうでしょうか」

「機体は？」

「少尉殿にはA-10を貸代されるということです」

アメリカは日本帝国と違い、G弾使用後の後処理に戦術機を用いる事を前提としている。

それは戦術機開発にも反映されており、現にF-22ラプターなどの特徴であるステルス機能や、米軍機特有の砲撃能力と、対人戦能力の高さがそれにあたる。

対人戦用戦術機を開発している時点でナンセンスだろうに…。しかも本音を言えば、BETAによって人類が危機的状況に立たされている今の現状で対人訓練なんてやる気は無いのだが…まあ、此処で無碍にする事も出来ないので、シェリングに許可をとり、格納庫に向かった。

「俺も出るよ。少将殿には許可を取ったからね。…強化装備は自前かい？」

「はい、白銀大尉。こんな事もあるつかと持参して」「うわっ！
！」「……」「なっ！？」

そりゃ驚くだろう。

妙にパンパンに膨れた旅行用のジュラルミンケースを開けたら、小学生が3人も出て来たんだから。

「……（呆然）」

「「あはは……すみません……」」

1人はこの間再会した白銀武。

そして後の2人のうち、1人は“山吹色”の着物の女の子、1人はパーカーにジーンズを履いた男の子だった。

「……お久しぶりです、“中佐”」

「……久しぶりだな、“篁”中尉に、“龍浪”中尉」

タケルが白銀大尉にたつぷりと絞られた後、シェリングに呼ばれた大尉が退出した。

そして現在……タケルと唯依ちゃん、ヒビキの3人を正座させてお叱りモードに入っていた。

「…全く、シェリングに許可取ってたんなら普通に言えよ。…今回はやっぱり入国リストに名前があったからよかったものを…一歩間違えれば外交問題だぞ！」

「…申し訳ありません、中佐。シェリング少将殿と香月博士の指示で…驚かせてやれと」

「あいつ等……。まあ仕方ない、俺はこれから模擬戦を行う。その間は国崎大尉の指示を仰げ」

「…はい中佐」

「はあ…今は、少尉だ」

『着座調整が完了しました。
全システム、オールグリーン。
誘導路へのアプローチを開始してください』

「了解。コールサイン「リンクス1」、これよりアプローチを開始する」

A-10A・サンダーボルト？を主脚で誘導路に移動させる。

『訓練内容を確認します。訓練内容はCASE：47、2機編隊同士の対人戦闘訓練です。』

装備は双方共に対人類装備。

付加要素は両軍共にCP壊滅、演習場全域は光線級支配空域内設定、戦域データリンクの共有は僚機のみとなります。

また、リンクス小隊は急遽リンクス2が出撃出来なくなったので、リンクス1のみとなります。』

「敵機体情報は回覧可能か？」

『少々お待ちを……了承を得ました。敵戦術機情報を送信します』
情報を受信し、機体情報を回覧する。

「敵機体は…F-15CイーグルとF-18ホーネットか…。ホーネットは軽量で小回りが利くし、イーグルは潜在能力がなかなか高いからな…間合いに注意しないと…」

『…全項目チェック終了。進路オールクリア！！発進準備完了…御武運を』

「……了解」

主機出力を上げ、ジェットとロケットによって構成されたハイブリッドエンジンに点火し、スラストリザーバーを解放する。

「…ははっ」

重量型攻撃機ならではの、身体の底に響く重低音を機体越しに感じると…心が躍る、血が騒ぐ、闘争本能が叫びだす！！

「はははっ…！」

この世界でやっと乗れた愛機が眼前の演習場を睨み付け…、両肩の GAU - 8・30mmガトリング砲を試験運転すれば、敵^{エサ}を渴望するかの如く唸りを挙げる！！

「はははははっ！！」

総てを破壊し尽くす血に飢えた大砲鳥が、獲物を求めて跳躍ユニットで雄叫びを上げる！！

「何処の誰だか知らねえが、教えてやるよ…。中途半端に“俺達”の前に立ち塞がる奴は…BETAだろうが人類だろうが容赦はしねえ！！」

跳躍ユニットがロケットエンジンを噴かせ、一気に推力を得て…堅く、重厚な装甲を纏った“亡霊戦士”を大空へいざなう！！

「リンクス1、テイクオフ！！！！」

たった1人、亡霊戦士は世界の空へ甦った。

世界中の人々は気付かない。

今日、この日…因果の歯車は…動き出していた。

B
G
M

B
A
C
K
-
O
N
•
Z
E
R
O

5・任官、そして“渡米”（後書き）

A - 10 みたいな重量感溢れる機体は大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8732w/>

マブラヴオルタネイティブ - 煉獄に吼えし双頭の狂犬

2011年11月11日06時30分発行